

まちづくりデザイン&シミュレーション・ゲーム



話し合いを進めながらまちづくりのプロセスが擬似的に進む



都市・地域研究所・シミュレーションラボでの話し合い



住民がデザインゲームで作成した模型のシミュレーション

シナリオ・メイキングの技術

成果 コミュニティづくりのための社会技術の理論化

●主たるアウトプット

- 可視化手法

... 研究開発プロセスの可視化、共有を図るものとして.

- (1) 年表形式 (2) ダイアグラム形式
- (3) PDCA形式 (4) 多重な螺旋図形式

- テキストによる分析手法

... 可視化したプロセス情報の補強、補足に寄与するものとして.

- 7つの評価インデックス

... 成果を共有する／幅広く発信する仕掛けとして.

- ドキュメンタリー映像

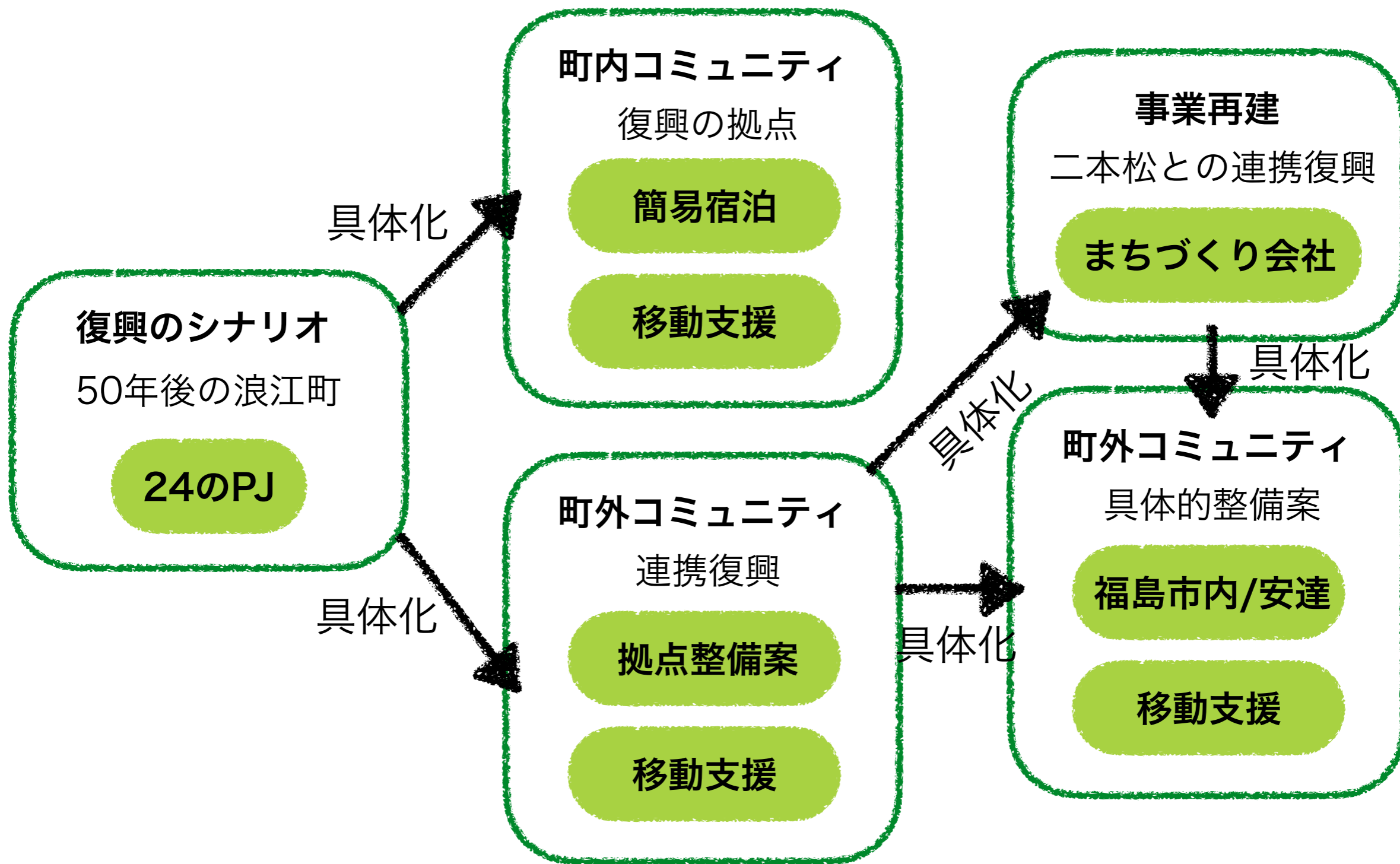
... 可視化したプロセスの中から、地域協働を主軸とする社会技術開発における要所を読み解く、振り返る指針として.

年表形式

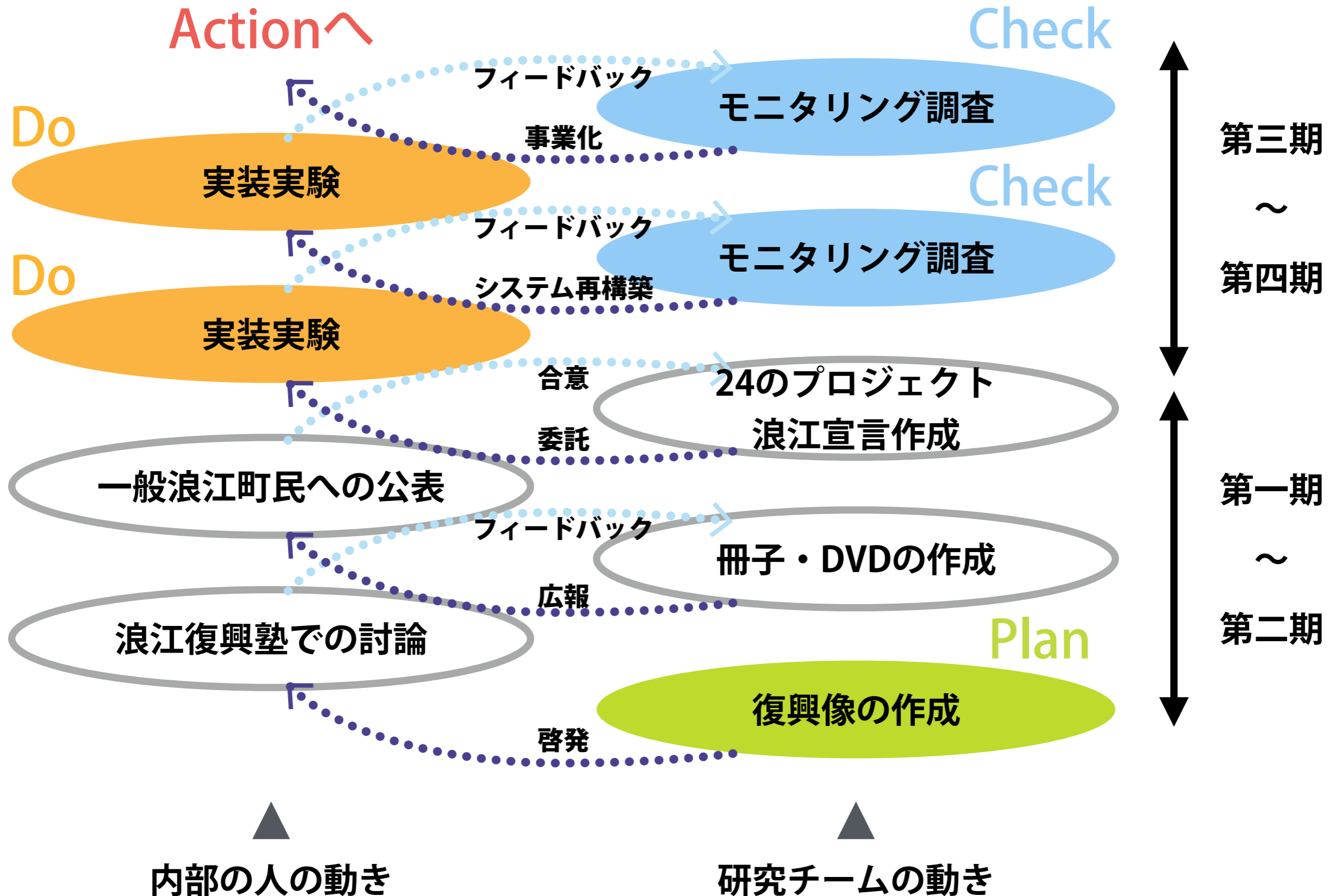
■高齢者の営農を支える『らくらく農法』の開発 情報整理用フォーマット(時系列) 2016年11月17-19日調査用資料

時間軸	全体計画/発信	体制	集落点検G/伝統食	PPKG スポーツ科学による明確な数値評価	らくらく電動運搬車G 急傾斜対応 意見を引き出しやすい完成度6割でWS	らくらく栽培G 商品開発、出荷ルート確保
【H25】 【H25下】	<ul style="list-style-type: none"> ●ゲストハウス(集会場の活用) ●自治会が運営するピザハウス ●葉草栽培(レモングラス)若い男性が収穫して、おばあちゃんが袋詰めする ●元気印事業①集落事業(話し合い)20万円まで助成、②推進事業200万円まで助成(市民事業の具体化支援) ●COC+サテライト(奈良女子大30名が参加してコミュニティリサーチ)女性のネットワーク活性化 	<ul style="list-style-type: none"> ●集落は二重構造(栃原全体の神社と集落の小さいお祭り) ●30代女性は外から来て、子ども園などで交流している 	<ul style="list-style-type: none"> ●小学校の食育 ●栃原食の交流会の開催 ●集落点検によって整理された栃原で昔食べられていた食事を、村の若者と奈良女子大学の学生、生協食堂関係者で試作した。ここで試作された「里のおはき餅」が好評で、地域で若い女性にそのレシピが広がった。 	<ul style="list-style-type: none"> ●町のケーブルTV(95%の下市全体の住民が見ている)で、らくらく体操を週1回流す。 ●個別の農作業に合わせた、体操の開発は可能? 	<ul style="list-style-type: none"> ●電動運搬車の改良バージョン(クローラ型、有線リモコン)および一輪車3種類の試作が完成したので、らくらく栽培用のモデル園にて住民の方に試運転していただき、感想意見を得た。栃原の方の評価もかなり高かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ●柿の葉すし作りの体験ツアーの開催 ●柿の葉を自分で獲り、柿の葉寿司を作って食べる。40-50人の参加。 ●柿の葉茶、芍薬、パウダーの開発 ●柿の葉寿司の柿の葉、9割は中国産。中国産は1円50銭、栃原産は5円50銭。安全な品質管理で100万枚を目指す。 ●2016年11月現在、11件の農家が参加。
【H25上】	<ul style="list-style-type: none"> ●7月 地域づくり推進課設置 ●97%の人が日帰り圏に住むことから、包括的な取り組みが必要」と認識。 ●柿が売れるのは個人の話、地域全体で取り組むことができる仕組みに対し、地元の声「すごいやんけ」 ●地域との距離感や、地域の背中を押す方法がわかってきた。住民が自主的に何かやるのが大切。時間をかけて少しずつやる。 		<ul style="list-style-type: none"> ●仲良しグループインタビュー(世代別に女性インタビュー)地域コミュニティの維持の大きな鍵なのは女性であると考えられるので、60代、40代、20代の女性の仲良しグループ数名ずつが集まっていたが、地域生活の現状、世代間の考え方の違いなどを伺うと同時に、我々の側からプロジェクトの趣旨説明などを行って行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ●寄り合い身体点検でわかってきた高齢者(社長の先達)は、自身の身体能力の向上にたいして、自分自身でできるものが不自由なものが使えるようにしてほしいと希望を出した。その先生を紹介し、お互いの関心を出し合った。 ●地域の農業現場を視察し、らくらく電動運搬車Gメンバ 	<ul style="list-style-type: none"> ●らくらく栽培のモデル園が従来型と休耕田利用型の2つを栃原内に開設した。 ●柿葉の集荷・出荷を引き受ける組織が栃原内に立ち上がった。「個人で販売なんて...農事組合があると頼りになる、心理的に違う」「建設業協会の予算の窓口になる」 ●柿葉栽培を普及させるためには実際どれくらい収益があるかを明らかにする必要があったが、モデル園での試験栽培・販売の結果、収益の概算データがとれた。 	
【H24下】			<ul style="list-style-type: none"> ●自治会役員への中間報告 ●寄合点検のデータ整理・解析方法について議論を重ねつつ、情報をまとめる。まず自治会役員に中間報告を提出した。大字で300名住んでいる。小さいのことは知らない。 	<ul style="list-style-type: none"> ●寄合点検実施 ●メンバーが農作業(男性)体験「こんな運動?いつも収穫して運動しているから、いらん」 	<ul style="list-style-type: none"> ●寄り合い身体点検に運搬車を持参。「個別開催なら男性しか来なかっただろう」 	
【H24上】	<ul style="list-style-type: none"> ●シンポジウム開催 ●自治会役員会で説明 ●地元直売所4周年記念イベント参加 ●地元説明会開催 		<ul style="list-style-type: none"> ●奈良県面談 ●奈良県に対しては、県農林部農業水産振興課、南部農林振興事務所、東地域振興部南部振興課へ事業紹介の挨拶に向いた。 ●下市町長と面談 ●下市町に対しては、栃原地域自治会長から紹介を受け、担当課に説明に行った。更にその担当課を通じて町長にも挨拶し、事業への協力を依頼した。 ●集落点検研究事例調査農業情報の収集、集落点検の予行実施 	<ul style="list-style-type: none"> ●農業現場の視察 ●過去に取り組んだ体操DVDを渡したところ、生活改善イベントで活用し、喜んで頂いた。 ●今までの体操作りには、意識が高い人が関わり(教える人)、テーマもメタボなど与えられていた。らくらく体操は、テーマを探るところから始まった。 	<ul style="list-style-type: none"> ●地元視察、自治会役員会で説明、電動運搬車(初期型)試運転(果樹センター) ●地域の農業現場を視察し、らくらく電動運搬車に必要な課題を見極めた上で開発を進めている。 ●「いいテーマ頂いた」「地域性も近い」 	
【H23下】	<ul style="list-style-type: none"> ●新聞社取材 ●果樹セや奈良女子大では日頃から開発した技術の紹介等でマスコミ機関の記者に知己があり、県庁記者クラブ等の公式な情報発信と平行して情報を提供していった。 ●HP開設。 ●「奈良女子大が来て何かやっているらしい」「らくらく農法って何？」 	<ul style="list-style-type: none"> ●奈良女子大学内にPJ専用ルーム設置、ML開始、DropBox設定、-日常的に電話や直接対面を行い、更にメールリストや共有ネットフォルダによる情報の共有を図った。 -PJの専用ルームを設置するとともに、スカイプによる遠隔地とのテレビ会議システムを活用した。 -グループの活動報告の際には、議事録的な文章だけでなく、極力、写真・動画などを含めるように意識をしている。 				<ul style="list-style-type: none"> ●栃原の柿畑の一部を柿葉専用園に改造 ●既存の柿畑の樹を用いて、特産品の柿の葉寿司の葉を専門に栽培する柿葉生産園に改造

プロジェクト進行ダイアグラム (浪江ネットワーク・コミュニティの例)



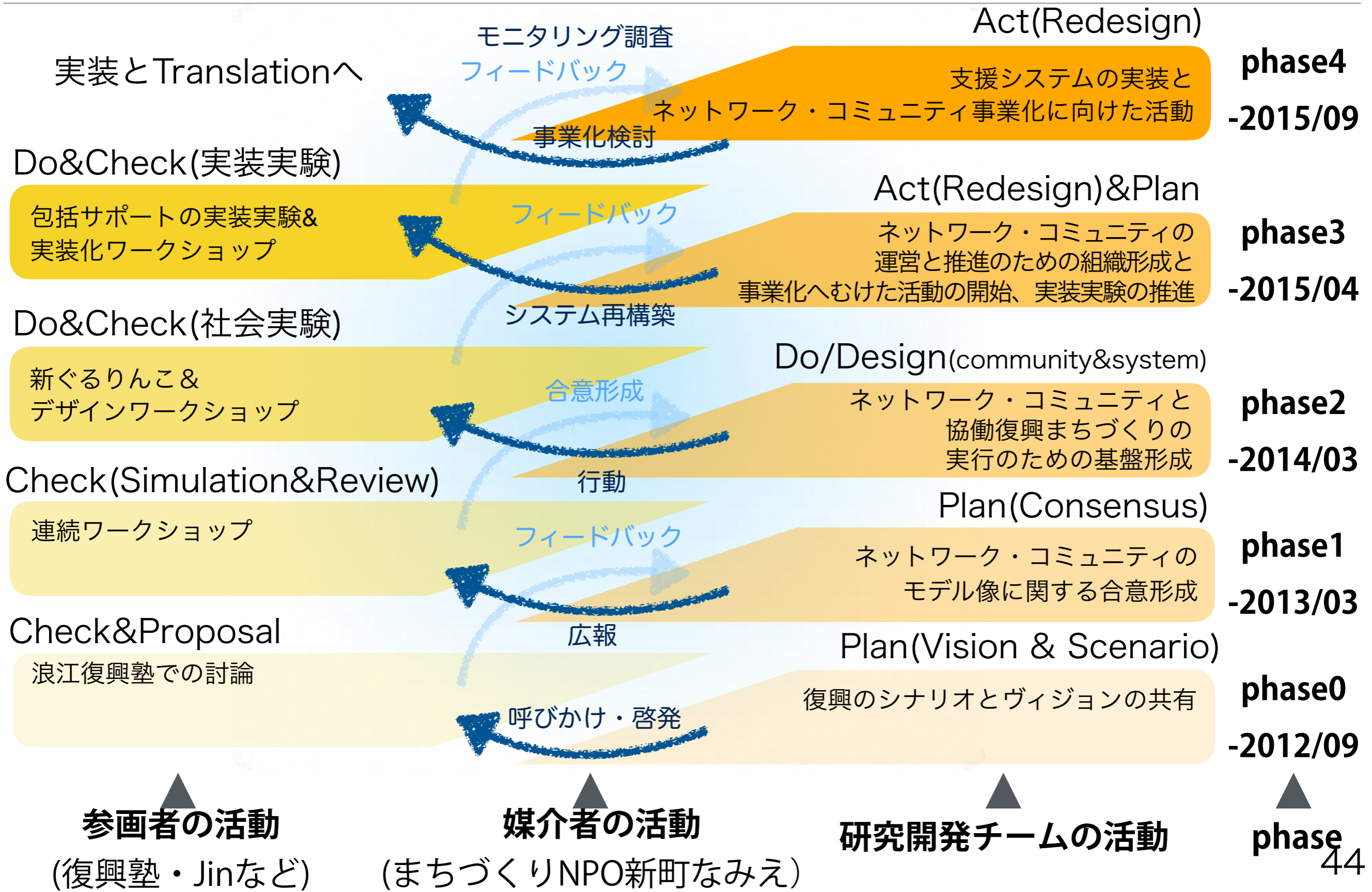
アクションリサーチの変遷



PDCAとしての表現 (浪江ネットワーク・コミュニティの例)

G1 : ネットワーク・コミュニティのデザイン
 G2 : 統合型移動支援システム
 G3 : 社会心理学的な視点から評価

広域避難者による他居住・分散型NWCの形成



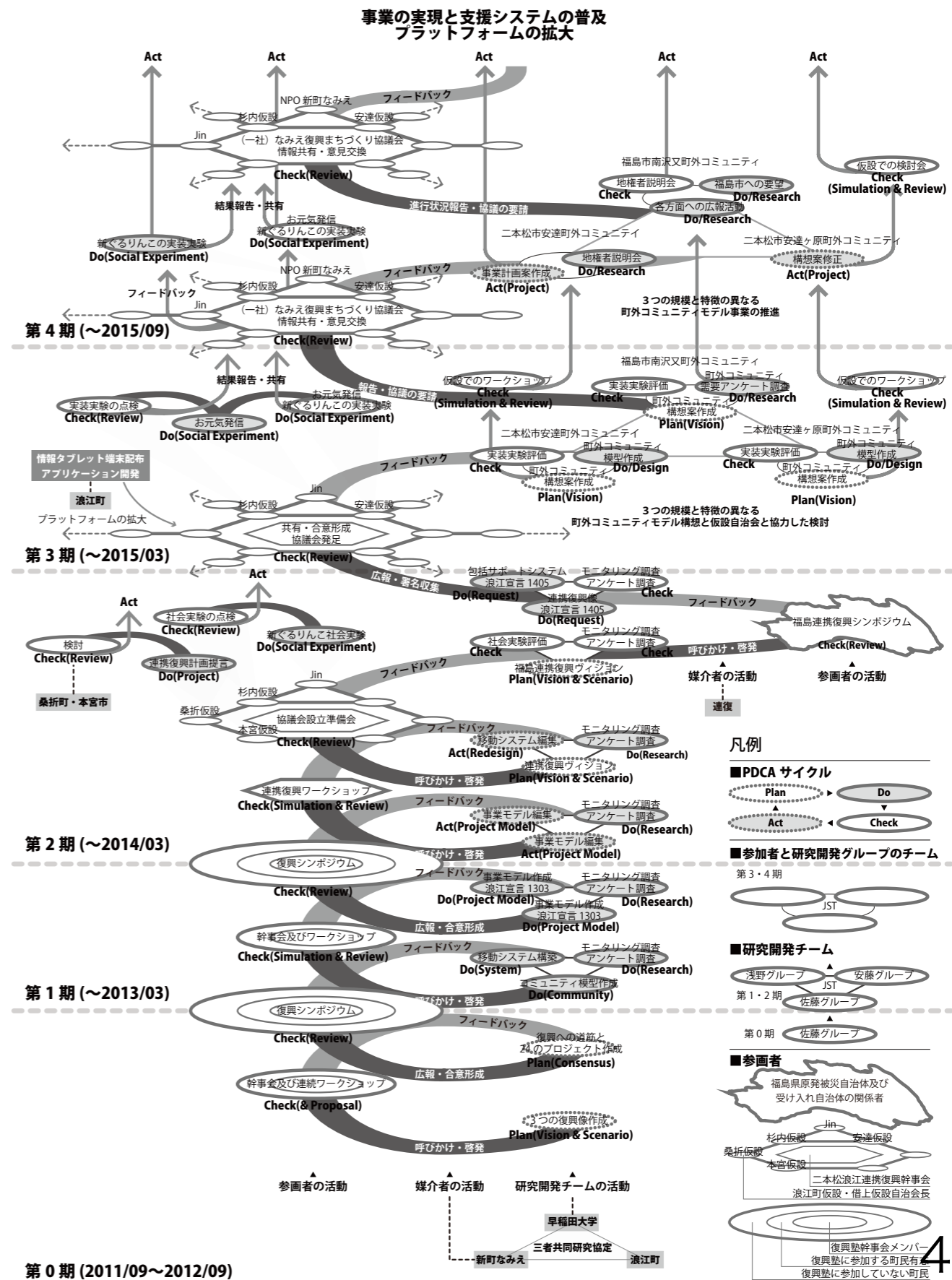
螺旋図によるプロジェクト進行の表現 (浪江ネットワーク・コミュニティの例)

アクションリサーチとしてのネットワーク・コミュニティの形成プロセスの記述と可視化

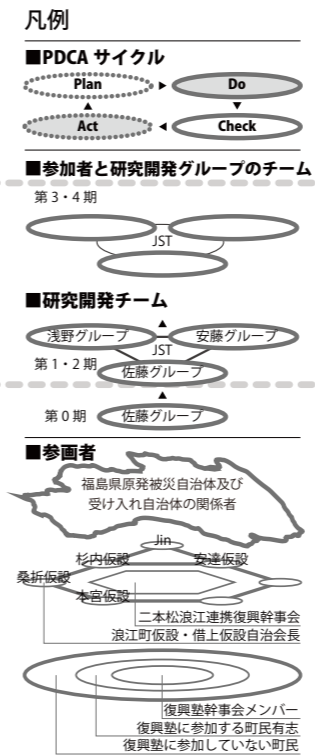
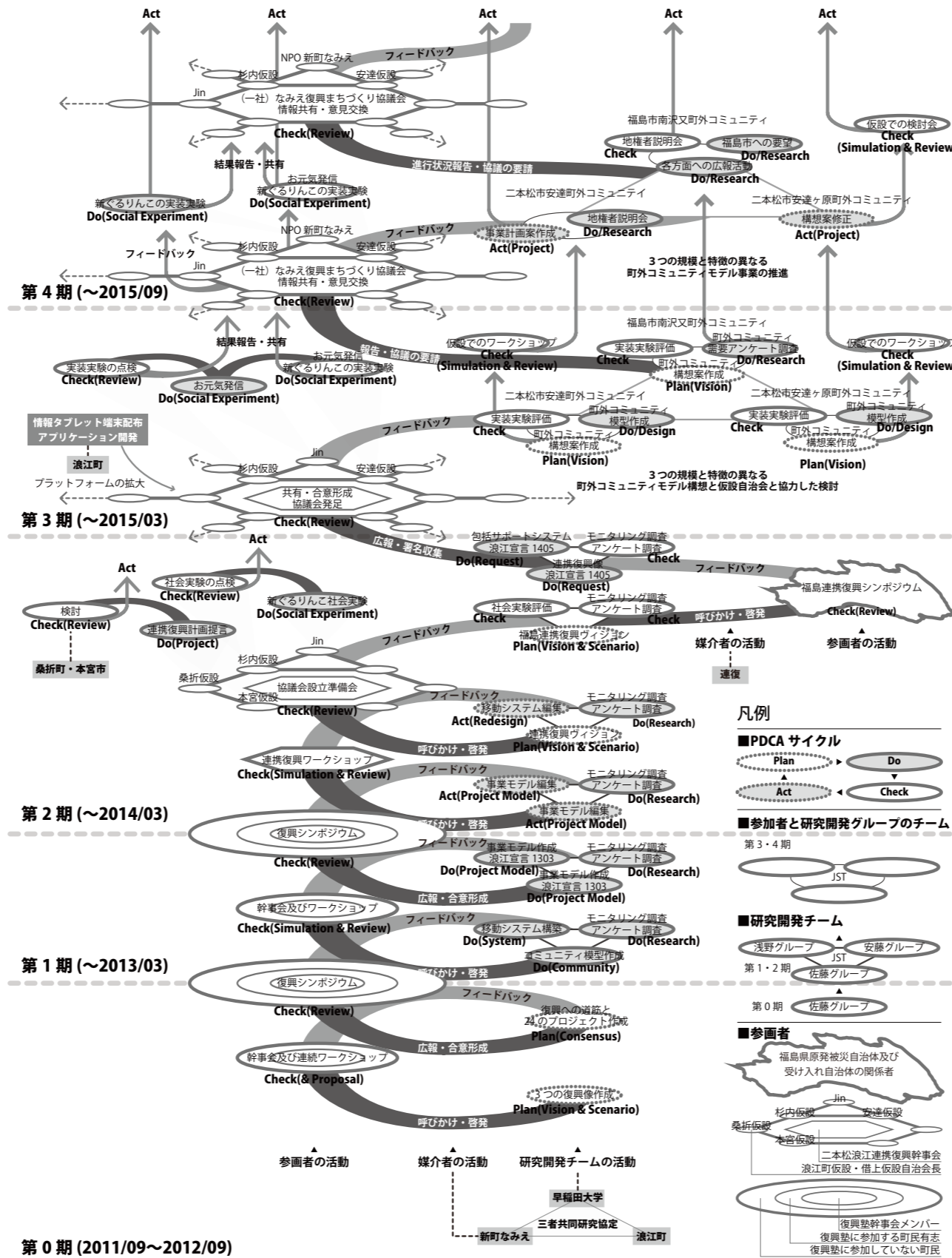
- プロジェクトの推進過程
- 改善・進行のプロセス
- フィードバックの様子
- 個別プロジェクトの位置づけ
- 担い手となる組織の役割関係

可視化

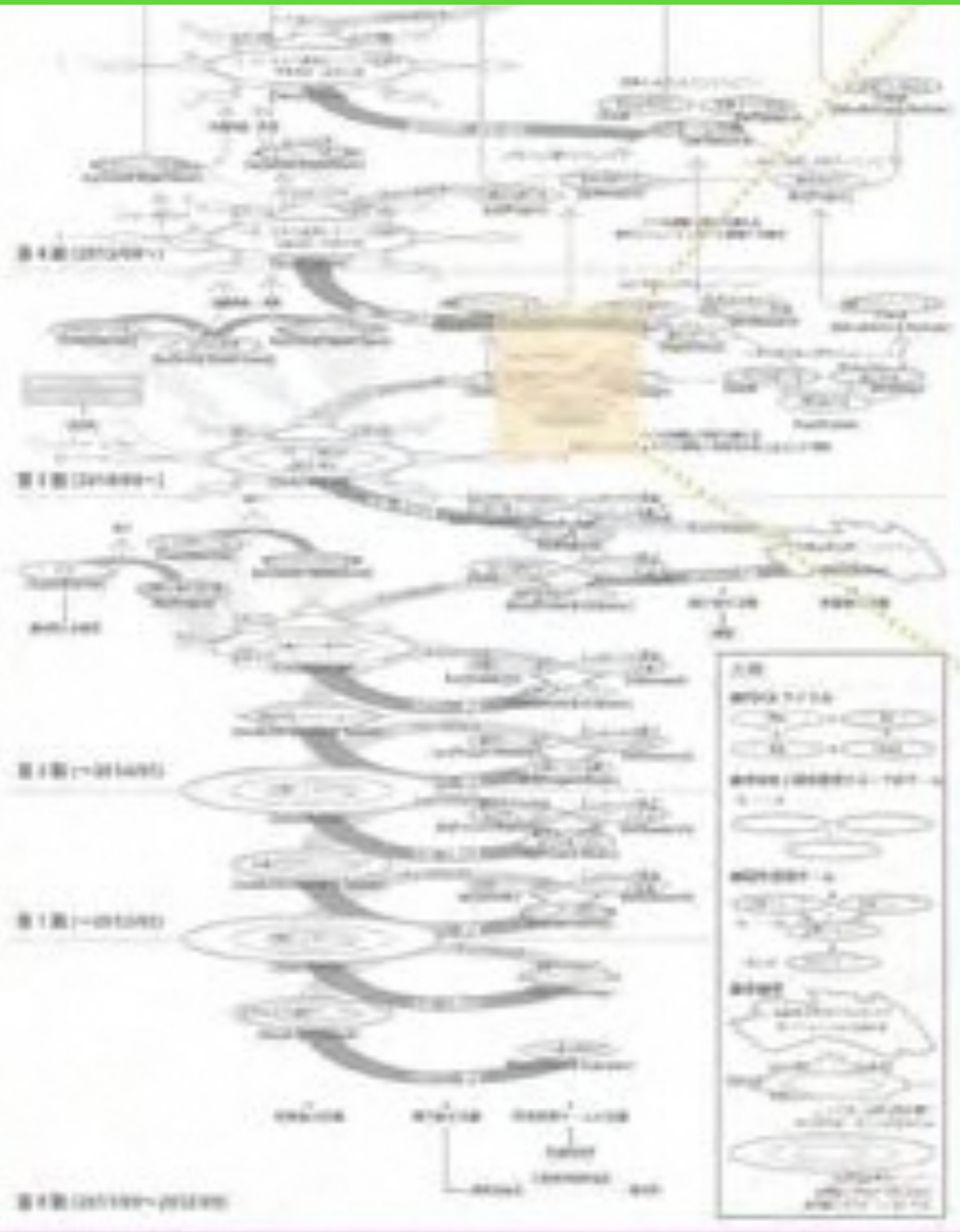
- 過去のプロジェクトの進行評価と共有
- 多主体協働の体制による将来のシナリオとプログラムの検討合理化



事業の実現と支援システムの普及
プラットフォームの拡大



螺旋図に紐づいたデータベースの構成



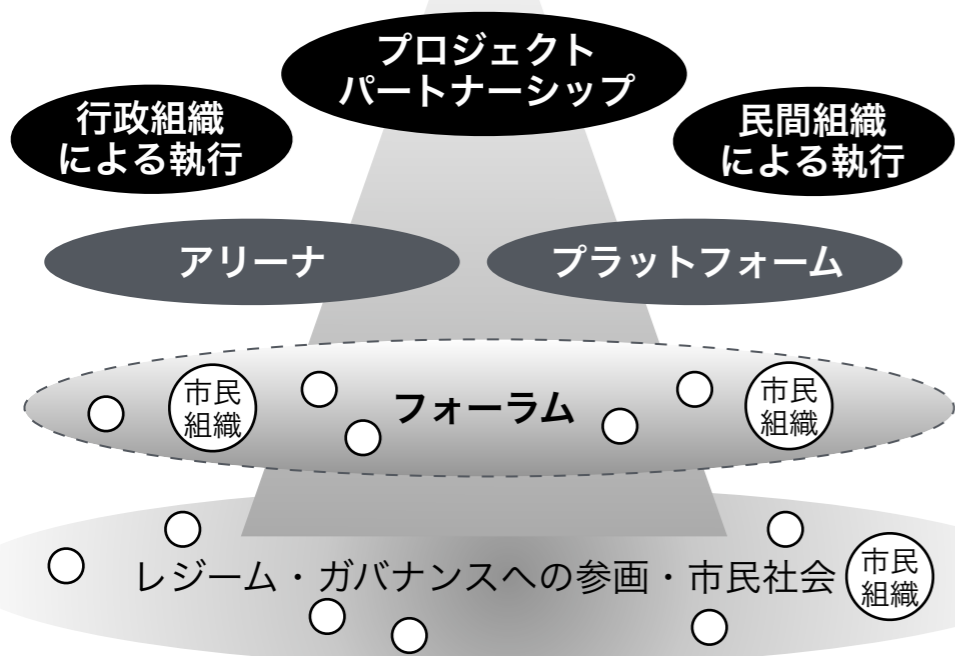
- ネットワーク・コミュニティの形成プロセス図・・・アクションリサーチのプロセスとしてのプロジェクトの総体
- プロジェクトアーカイブ
- ・・・個々のプロジェクトの内容、検討と発展の経緯
- 関係アーカイブ
- ・・・各種検討やワークショップの内容、検討の様子

地域協働の布陣をデザインする

多主体連携による地域協働の布陣（認識・発見・デザイン）

パートナーシップの類型 まちづくりの布陣

組織のミッションや具体性、メンバー構成、外部からの透明性といった観点から類型化を行い4つの類型を発見した。フォーラムにおける自由な論点形成を経て、アリーナやプラットフォームが成立し、そこでの議論と決定を持ってプロジェクトパートナーシップが生まれることが表現されている。4類型は独立しているのではなく、重なり合い段階的に変容したりしながら存在する。体制は地区固有かつ段階的であることと一致する。



パートナーシップの類型から4つの特徴的なまちづくりの布陣を描く。フォーラムを基盤とする。

プロジェクト・パートナーシップ型

は、コストリスクが前提で、限定的で具体的なプロジェクトの実行を目指す。その時々状況に対応し、法人化も支えうる可能性の高いフォーラムをアメンバー状の形状で表現している。

プラットフォーム型

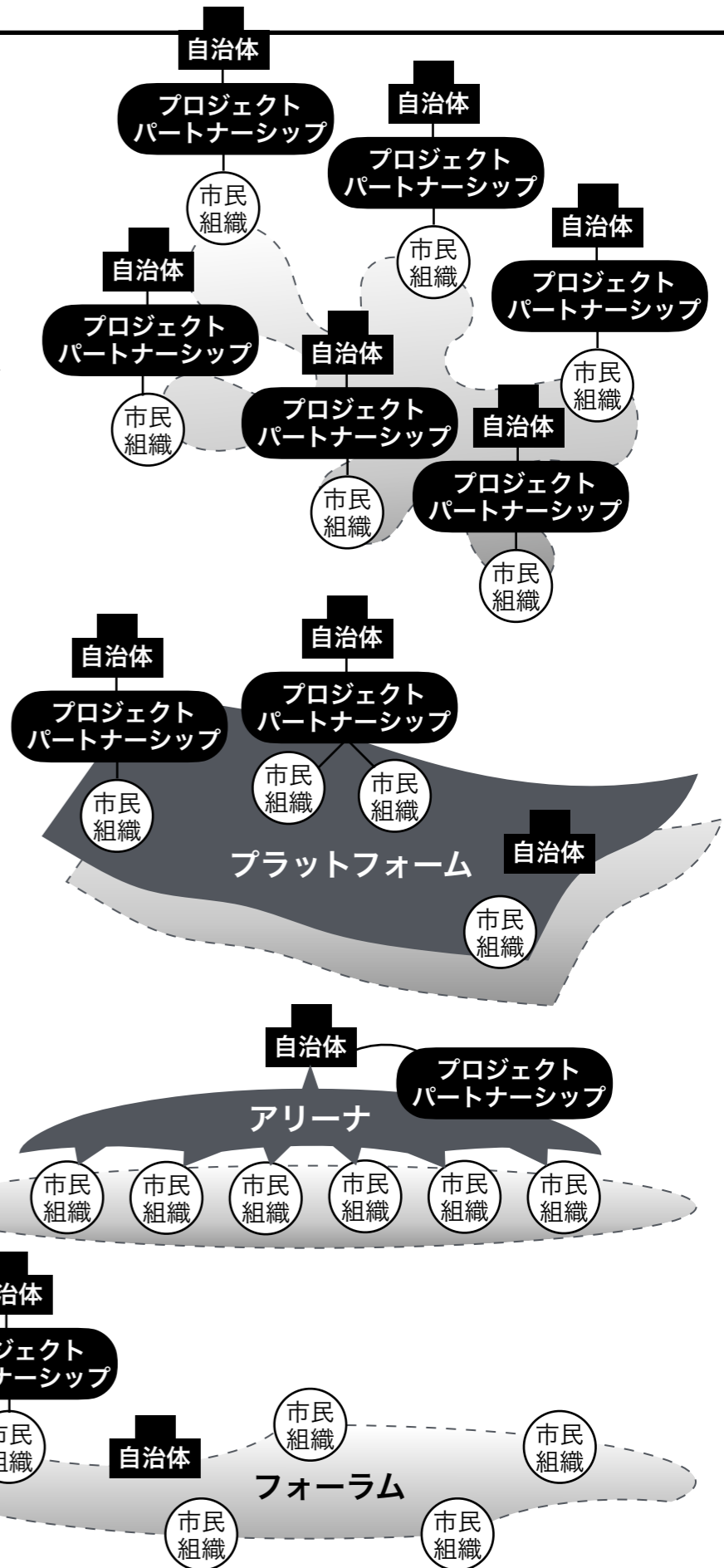
は、明確な目的に向けて調整、決定を行い、市民組織が決定者かつ実行者となる。自らの役割を意識した参画が必要となる。決定かつ実行の場であることを角ばった形で表現している。

アリーナ型

は、市民組織同士が対等な立場で参画し、公的で会議的な役割を担うため、全体像が明確。市民組織の意見を集約し、自治体との調整を行うアリーナの役割が傘の形で表現している。

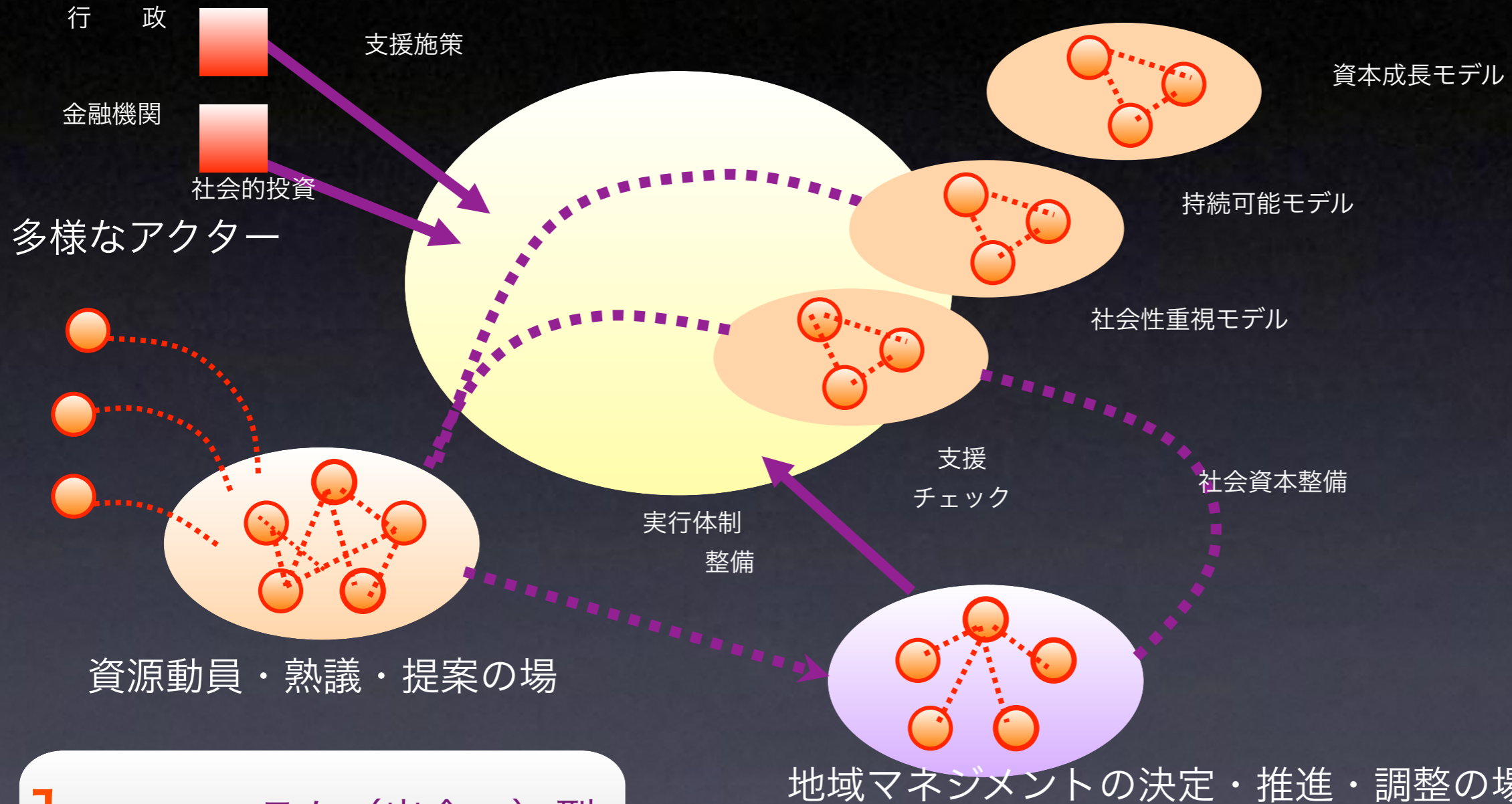
フォーラム型

は、枠組みが穏やかで参加しやすい意見交換の場。



4 事業支援（プラットフォーム）型

スタートアップ支援のマッチングの場



1 フォーラム（出会い）型

まちづくり協議会

2 アリーナ（共治）型

3 事業推進（パートナーシップ）型

多様な協働型チャレンジ・プロジェクト発生

多様な地域連携による地域運営のイメージ（早田宰作成）

*ここでのパートナーシップは広義の地域協働の関係の意味

関連文献・資料映像

福島県浪江町、原発事故の1年目から6年間の住民活動のドキュメンタリー映像記録（6巻）佐藤滋監修 早稲田大学都市・地域研究所制作（Youtube にアップしてある）

<https://www.youtube.com/watch?v=GnR4QoVTx68&feature=share>

川原、佐藤滋、「シナリオ・メイキング」, 「まちづくり教書3-2」（編著、2017年2月、鹿島出版会）

佐藤滋「循環型復興とネットワーク・コミュニティ—原発被災地において多地域で暮らすために」BioCity75号, 2018年7月

Satoh, Shigeru, Evolution and methodology of Japanese Machizukuri for the Improvement of Living Environments, JAR review, 2019, January

<https://rdcu.be/ble4b>

まちづくりドキュメンタリー映像（佐藤滋監修）

東日本大震災大震災—復興まちづくりの現在—2013年秋（DVD 全8巻）

第7巻 福島県浪江町 夢を復興の力に —浪江住民たちの戦い— 丸善出版、2014年3月

<https://www.maruzen-publishing.co.jp/item/b301803.html>